



Faculty Publications

2011-07-10

**Chusei waka ni okeru nijiteki shizen to yaseiteki shizen: Saigyō,
Jakunen no 'yamazato' zotoka o chushin ni / 中世和歌に於ける二
次的自然と野性的自然—西行・寂然の「山里」贈答歌を中心に**

Jack C. Stoneman

Brigham Young University, jackstoneman@byu.edu

Follow this and additional works at: <https://scholarsarchive.byu.edu/facpub>



Part of the [East Asian Languages and Societies Commons](#)

BYU ScholarsArchive Citation

Stoneman, Jack C., "Chusei waka ni okeru nijiteki shizen to yaseiteki shizen: Saigyō, Jakunen no 'yamazato' zotoka o chushin ni / 中世和歌に於ける二次的自然と野性的自然—西行・寂然の「山里」贈答歌を中心に" (2011). *Faculty Publications*. 5594.

<https://scholarsarchive.byu.edu/facpub/5594>

This Peer-Reviewed Article is brought to you for free and open access by BYU ScholarsArchive. It has been accepted for inclusion in Faculty Publications by an authorized administrator of BYU ScholarsArchive. For more information, please contact ellen_amatangelo@byu.edu.

中世和歌に於ける二次的自然と野生の自然

― 西行・寂然の「山里」贈答歌を中心に

ジャック・ストーンマン

Jack Stoneman | Brigham Young University, プリガム大学東
亜中近東系語学部日本語学助教授、専門は古典文学、中世和
歌、アジア美術史。論文に「Why Did Saigyō Become a Monk? An
Archology of the Reception of Saigyō's *Shūka*」, *Journal of Japanese
Language and Literature*, Vol. 44, No. 2 (12/2010), pp. 69-118. 「美術・和
歌に於ける客体及び媒介―ハルオ・シラネ編『越境する日本文
学―カノン形成・ジェンダー・メディア』(勉誠出版、二〇〇
九年)などがある。

平安時代の僧侶、西行と寂然が交わした歌の中に、現代われわれが問題にするエコクリティシズムと日本文学、都市と自然環境を新たな視点から考えるヒントが得られるであろうか。その歌は、遠い昔の隠者が体験した自然と和歌表現の世界とのズレに、人間と都市、二次的自然と野生的自然との関係を、今日考慮する上で、貴重な資料になると考えられる。

かいじゅうたちのいるところ

ある夕べ、マックスという少年が狼のコスチュームを着て遊ぼうとするが、母親が狼ごっこにつきあつてくれず喧嘩となり、マックスは晩御飯を食べずに部屋に閉じこめられる。そのあと、マックスの部屋は自分の野性的な感情に答えるかのようになり、普通の子供部屋から森へと変貌を上げる。マックスは、部

屋の森から、舟に乗つて、かいじゅうたちのいるところへと向かう。これは、かのモリス・センダック著の『かいじゅうたちのいるところ』の物語である。

西行法師(一一一八―一一九〇)は、二十三歳の若き時分に出家をとり、都周辺の白河、嵯峨、大原などで草庵生活をおくった。これは平安時代によくあつたパターンで、貴族が出家遁世をすると、都周辺の、二次的自然――たとえば、東山・大原・嵐山など――で世を逃れた生活をしたのである。西行もこの風雅な隠棲生活をしばらく送った。しかし、出家して約八年経った時、西行は人生の大きな転換を迎える。京を後にし、高野山に籠もつたのである。高野や近くの吉野で隠遁生活を送つた年月は三十年に及ぶが、初期の高野籠りの不馴れな生々しい経験を、都近くの大原で同じく遁世者の暮

らしをしていた友人、寂然法師(一一二〇頃―一一八二以後)に十首の歌に詠み贈つた。その歌は、みな「山深み」、つまり山が深いのでという意味を初句に据えた歌で、山の生活や自分が見聞きしている野生の環境を表現している。寂然は「大原の里」を五句に据えた歌十首を西行に返し、西行の歌の初句の「山」と寂然の末句の「里」は平安末期に隠棲の場として盛んになつた「山里」に符合している。この「山里贈答歌」は隠者としての理想だけでなく、それぞれ高野山と大原における隠遁の場の環境を描いている。西行の歌は革新的で、語彙もイメージも野性に富んでいるが、寂然の歌は保守的で、牧歌的な都市周辺の風景(二次的自然)を描く隠遁和歌の規範に即したものである。

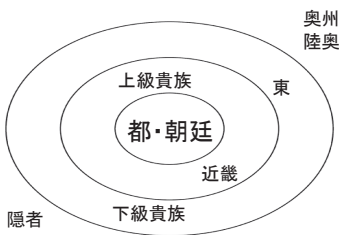
和歌の同心円

和歌には中央・周辺・奥地とがあり、それは歌に詠まれる風景にも、歌の詠み方にも当てはまる構造である。つまり、歌に詠む自然にも、歌を詠むしきたりにも中央から離れた「度」というものを常に測ることが出来る。その中央はもちろんだ、都・近畿・東・奥州(陸奥)へと風景の輪が広げられていく。社交的行動としての詠歌は都に中央が設置され、朝廷・上級貴族・下級貴族・隠者へとその社会的、かつ

階級的な輪が平安末期に広がつていた。このように風景と社会とが歌の世界では並行的な関係にあつた。

歌枕は、和歌が中央朝廷とその王朝文化を象徴する文芸であり、日本の自然、または国々を、ある意味で組織し、征服する手段の一つであつたことを示している。和歌に詠まれた名所はいつまでも渦の中の都の視点から捉えられ表現されてきた。名所歌枕を地図に示すと、その過半数が近畿地方に集中されており、しかも遠く離れた名所を歌に詠む場合でも、都の文芸である和歌の伝統に則つた概念や表現を通して描かれるのである。ようするに、二次的自然も奥地も、それが歌に詠まれることで、中央のフィルターを通した、王朝文化の風情を帯びるようになるわけである。なぜ都から遠く離れた、荒れたる海・森・山がこのように馴致されてしまうのか?

平安朝の和歌はあくまでも詞からなる文芸で、自然を描写する文章ではなかつた。歌人は限られた詞で歌を作り、その歌詞のカノンを形成したのは平安初期の勅撰集、三代集であつた。歌詞を管理し統制するようになったのが勅撰集・



歌合という晴れの場の文化活動であった。

このような中央文化の影響から遠ざかる傾向はすでに平安末期に見られていた。中央からの距離とは、実際に山々を隔てる距離もあれば、概念的・思想的な距離もある。西行は、環境と芸術の両方とも、つまり、都を離れ野生の山に身を置くことで、歌の表現においても、王朝和歌の世界をみごとに脱出することができた。「山里贈答歌」の西行の「山深み」十首を見るとそのプロセスが浮き彫りにされるようである。

山里贈答歌

まず、西行と寂然の歌を一对一風に並べてみる。

『山家集』一二八六「二一九八」～一三〇五「二二七」¹

入道寂然、大原に住み侍りけるに、高野よりつかはしける

一二八六「二一九八」 西行

山深みさこそあらめときこえつつ音あはれなる谷川の水

一二九六「二二〇八」 寂然

あはれさはかうやと君も思ひやれ秋くれがたの大原の里

一二八七「二一九九」 西行

山深みまきの葉わくる月かげははげしきものすごきなりけり

一二九七「二二〇九」 寂然

ひとりすむおぼろの清水友とは月をぞすます大原の里

一二八八「二二〇〇」 西行

山深み窓のつれづれとふものは色づきそむるはじの立ち杖

一二九八「二二一〇」 寂然

炭がまのたなびくけぶり一すぢに心ぼそきは大原の里

一二八九「二二〇二」 西行

山深み苔の筵の上にあて何心なく啼く猿かな

一二九九「二二一一」 寂然

何となく露ぞこぼるる秋の田にひたひきならず大原の里

一二九〇「二二〇二」 西行

山深み岩にしたたる水とめむかつかつ落つる椽ひろふほど

一三〇〇「二二一二」 寂然

水の音は枕に落つる心地して寝覚めがちなる大原の里

一二九一「二二〇三」 西行

山深みけちかき鳥のおとはせで物おそろしきふくろふのこゑ

一三〇一「二二一三」 寂然

あだにふく草の庵のあはれより袖に露おく大原の里

一二九二「二二〇四」 西行

山深み木暗き峯の梢よりものしくもわたるあらしかりけり

一三〇二「二二一四」 寂然

山風に峯のさき葉はらはらと庭におちしく大原の里

一二九三「二二〇五」 西行

山深み槽切るなりと聞えつつところにぎはふ斧の音かな

一三〇三「二二一五」 寂然

ますらをが爪木にあけびさしそえて暮るればかへる大原の里

一二九四「二二〇六」 西行

山深み入りて見と見るものは皆あはれもよほすけしきなるかな

一三〇四「二二一六」 寂然

むぐら這ふ門は木の葉に埋もれて人もさし来ぬ大原の里

一二九五「二二〇七」 西行

山深み馴るるかせぎのけ近きに世に遠ざかるほどぞ知らるる

一三〇五「二二一七」 寂然

もろともに秋も山路も深ければしかぞかなしき大原の里

最初に気づくことは、西行が歌枕を詠んでいないということである。その反対に、寂然は、高野を掛詞にして、おぼろの清水、そして全首に例外なく大原の里という歌枕を詠み、

その歌枕の縁語や連想をたくみに使い尽くしているのである。たとえば、大原の縁語として、「ひとりすむ」「すみがま」「けぶり」「こころぼそき」「やまじ」を詠んでいる。西行の

方は、故意に高野を詠もうとせず、何の歌枕も使わず、しかも隠遁の場としての山里や草庵に係る歌詞をほとんど避けているように思われる。たとえば、「草の庵」「雪」「風」「とう人」「けぶり」「やまじ」「つゆ」など隠棲の歌に当たり

前の詞は全く見当たらない。それだけではなく、西行は隠棲の歌に親しみのある詞を使う場合には、逆にそのありきたりの詞を特殊な扱いをすることによって、その親しみを打ち消そうとしているのである。たとえば、月を詠んだ歌には、普通は月影を修飾しない「はげしき」「すごき」の形容詞を据えている。また、紅葉の歌には「はじ」という、和歌には非常に少ない木を選んだのである。さらに、「はじ」を修飾する詞として先例がひとつしかない「色づきそむる」を据えたのである。つづいて、山籠もりの歌によくある「苔」を、ほかに用例なしの連結の仕方、「苔のむしろ」+「なくましら」という、極めて特異な詠み方をしている。そして鹿の常例の縁語、「なく」「萩」などを詠まず、前人未発の「なるるかせぎ」が自分の家の近くに来ていることで「世にとおざかるほど」を知らされたという特殊な表現にしている。

表1 先例なしの語句

No.	語句	西行後の用例
一一八六	あはれなる谷川の水	蓮月(二七九)〜(一八二五)に一首
一一八七	まきの葉わくる	三例、その中に『千載和歌集』入集(秋上一〇二〇)の慈円詠(一一五五)〜(一二二五)
一一八八	窓のつれづれ	二例、十八世紀と十九世紀に各一首
一一八九	何心なく	約十例、このフレーズは散文に顕
一一九〇	岩にしたたる	一例、十四世紀の『新撰和歌六帖』五四四の藤原信実詠(一一七七)〜(一二六五)
一一九一	ふくろふ	十七例、但し勅撰集に無し
一一九三	櫓きる	明治時代に二例
一一九四	見と見る	慈円に一首
一一九四	あはれもよほす	六例、その内四首は十二世紀末〜十三世紀初
一一九五	馴るるかせぎ	三条西実隆(一四五五)〜(一五三七)に一首

表2 他に用例なしの語句

No.	語句	
一一八七	月かげはげしき	
一一八九	苔のむしろ・ましら	
一一九〇	水とめむ	
一一九〇	かつかつ(西行後に一例あるが、落椽の音でなく幽かに見えるの意)	

次に気づくことは、西行は画期的な詞遣いをしているという点である。定例ではありえない程に伝統を破る詞を、西行は大胆にも選んだのである。西行のユニークな措辞を三つの表にまとめてみた。

西行がこの十首の歌の中に先例なしの語句を十個、他に用例なしの語句を十一個使っているのに対して、寂然の歌は、伝統的な和歌の修辭法にそって、掛詞・縁語などを多く含み、隠遁の歌によく出る詞や表現を使用している。それに、西行が寂しさや賑わい、哀れ、恐怖、吃驚など実に多彩な心境を詠んでいるのに対して、寂然の歌は隠棲の歌によくある心境、寂しさ・人こいしさ、を表現することに専念しているようである。西行のいわば野性的な詠歌は、きわめて保守的な和歌の世界では許されなかった、反則に及ぶとまで言えるかもしれない。しかしながら、西行はこの歌を『山家集』に収載し、そして後の『夫木和歌抄』や『玉葉集』にも「山深み」の歌が入集された。その影響は慈円(一一五五)〜(一二五五)、後鳥羽院(一一八〇)〜(一二三九)、鴨長明(一一五五)〜(一二一六)、健礼門院右京大夫(一二五七生)、宗祇(一二四二)〜(一五〇二)、三条西実隆(一四五五)〜(一五三七)、松尾芭蕉(一六四四)〜(一六九四)などの作品にも見ることができている。

この型破りな西行の歌が、どうしてこのような影響を持つ

一一九〇	椽ひろふ(『万葉集』に数例あるが、実でなく色の意)	
一一九一	きぢかき鳥	
一一九二	木暗き(コグラキは歌に多例あるが、木々を表現する木暗きでなく陰を表現する小暗き)	
一一九二	木暗き峯	
一一九二	ものものしく	
一一九三	ところのぎはふ	
一一九五	世に遠ざかる	

表3 他に用例少なしの語句

No.	語句	西行後の用例
一一八七	すぎき	歌に「すぎき」又は「すごし」の先例は二首のみ。散文に現れる言葉であったが、西行後は歌詞としても使われるようになる
一一八八	色づきそむる	約二十例、その内西行以前の用例は一一五〇年の『久安百首』一四一番のみ。慈円に二首(『拾玉集』七五五、一二五四)。後鳥羽院に一首(後鳥羽院御集)一五八六)
一一八八	はじ	一例のみ(『金葉集』二四三)
一一八九	啼くましら	西行以前の勅撰集に二例のみ(『古今集』『拾遺集』)。『万葉集』『和漢朗詠集』の漢詩に数例
一一九一	物おそろしき	先例は二例のみ、その一例は「夕暮」を修飾する。後例は江戸時代に一例のみ
一一九三	斧の音	先例は七例、『金葉集』二四九など

ようになったのだろうか。外の世界にある野生的自然と、そこに棲み、そこで歌を詠む隠者は、中世になると中央の和歌文学に影響を及ぼすようになる。これは和歌史の重要な転換期である。西行はその転換期を代表する歌人であった。また、西行は、和歌の表現の世界の転換期はもちろん、『新古今集』の新派歌人の革新の時代の歌人でもあった。歌人、または隠者が自然とどう接するか、都市・二次的自然・野生的自然と人間との関係が大きく動いた時期でもあったのだ。その真つ只中にある西行が、歌の世界では見たことのない、奇怪な「山深み」十首を詠んだということは、——その歌の反逆分子はともかく——平安から中世へと文芸的・社会的な変転期の瞬間の醍醐味だったのではないかと思われる。

都市・自然・野生

われわれが「自然」を考えると、やはりモダンの観念としての都市化対自然保管が思い浮かぶのではないだろうか。それは、工業化にともなう都市化や自然破壊に対して、自然保護や環境保護主義といった、自然を守るという、二十世紀に現れた対話的な思想である。しかし、都市・二次的自然・野生的自然というわれわれの生きる環境を組織する観念も、そして世相の墮落・破壊・俗塵に嫌悪感をいだき、そこから逃

れて野生に棲み自然を喜ぶ価値観も、モダン社会や工業化以前からある考え方であり、あるいは趣向である。

西行は、中央都市から離れた野生の、深い山に棲むと同時に、和歌の世界の中央あるいは伝統・規範的な詞表現から距離を取った。西行など平安末期に増加していた遁世者たちが実際に知っていた、馴致されぬ自然を描くには和歌の伝統的な詞表現では不十分だったのである。そのため、都市を逃れて野性的な深山の怪異に出会う時、西行は主流文化の視点から捉えられてきた山里や草の庵、つまり王朝の風雅を帯びた隠遁の表現では物足りなさを感じた。たとえ伝統に反するとも、自分の野生的環境を忠実に表現しようとしたのである。その結果「なくましら」「ほだきる斧の音」「おそろしきふくろふの声」「椽ひろふ」「すごき月影」「ものものしくわたる嵐」など野生に富んだ表現が生まれたのである。

中央と外辺

中央・都市から生成する主流文化に、自分の野性、あるいは野生に身を囲みたいという衝動を認めさせるためには、その中央を離れるしかないであろう。マックスは、お母さんが狼ごっこに乗ってくれないどころか、自分の野性的感情も認められず、しかも部屋に閉じ込められてしまったため、や

むなく、その部屋から野生の自然に逃避するほか道はなかったのである。そして、その野生的自然のなかに出会ったのが怪獣であった。マックスはその怪獣を征服し怪獣の王様になると、また海を渡って文明社会に戻る。すると部屋には、お母さんが置いてくれていた、ほかほかの晩御飯が待っていたのである。

西行は人生の最後まで中央には戻らなかった。野生に生き、自然に溶けこんだようである。「山深み」の最後の歌では、野生の鹿が西行に慣れて、つまり西行を野生の仲間を迎え入れる。その鹿が家の近くに来るが、これを、「世に遠ざかるほど」と、西行は表現した。しかし、留意すべき点は、西行は、主流文化の文芸である和歌で野性的自然を描くことによつて、やはり中央に向かう視点から自然環境を表現しているということである。

人間の野生の姿とは何か。人間はたとえ奥地、ヒンターランド（郊外）に居を構えても、中央なしに自分の存在を把握することはできない。われわれが想起する「野生的自然」とは、中央、つまり視点の軸がなくては存在しないのかもしれない。それならば、われわれが都市を嫌って自然に憧れることは何を意味しているのだろうか。西行にとつては、深い山に遁世を選んだのは仏教修行のためであった。ほかの時代、今の時代、人

間がかいじゅうたちのいるところに突入するということは何を意味しているのだろうかと問いたいものである。

注

(1) 番号は渡部保『山家集全注解』（風間書房、一九七九年）による。「」内の番号は大系・集成または西澤美仁・宇津木言行・久保田淳編の『山家集・問書集・残集』（明治書院、二〇〇三年）による。

(2) 表に示したデータは『新編国歌大観』を参考にした。